

—茨城県土浦市—

# 永国遺跡(第2次調査)

飯田をくに集合住宅建設工事に  
伴う発掘調査報告書

2002

飯 田 を く に  
土浦市教育委員会  
永国遺跡調査会

# 永国遺跡(第2次調査)

飯田をくに集合住宅建設工事に  
伴う発掘調査報告書

2002

飯 田 を く に  
土 浦 市 教 育 委 員 会  
永 国 遺 跡 調 査 会



調査区全景（南から）



遺構内検出遺物

## 序

上浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の偉業でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われまます。

このたびの調査は、飯田をくに氏の集合住宅建設工事に伴う、永国遺跡発掘調査による記録保存を目的として行われたものであります。

遺跡からは、縄文時代中期の狩猟用陥し穴が列をなして確認されました。また、古墳時代の竪穴住居跡が1軒確認されました。

この調査によって、市内永国地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立てて頂ければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、飯田をくに氏をはじめ、関係各位の皆様のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成14年9月

土浦市教育委員会  
教育長 尾見 彰一

## 例 言

1. 本書は飯田をくに氏の計画した集合住宅建設に伴う、茨城県土浦市永国寺御災1,029-2、3所在の永国遺跡の発掘調査報告書である。
2. 永国遺跡は1974年の調査が第1次であるため、今回は第2次調査に当たる。
3. 調査は永国遺跡調査会が実施した。
4. 発掘調査は2002年5月9日～5月25日まで行い、その後2002年6月4日～9月28日まで整理作業を行った。
5. 発掘調査から整理作業までを窪田恵一が担当した。
6. 整理作業の分扱は、以下のとおりである。

遺構図面整理・トレース	窪田
遺物実測・トレース	土器： 窪田・大久保教子・中野富美子 石器： 窪田
図版作成	窪田・大久保教子・中野富美子
写真撮影	遺構： 窪田・関口尚 遺物： 窪田
レイアウト	窪田
7. 本書の執筆は「第1章 調査に至る経緯」を関口尚が、その他を窪田が行った。
8. 本調査および報告書作成作業には、下記の諸機関または諸氏に御協力・御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

茨城県教育委員会 県南教育事務所 土浦市文化財保護審議委員会 中村信博 高野麻希
9. 本遺跡の調査で作成した遺物・記録図面・写真は上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。なお、遺物・記録図面には「NN2」を遺跡記号として使用している。

## 凡 例

1. 遺構番号は現地作業で付したものをそのまま使用した。
2. 土層観察における色相の表現は「新版標準土色帖」24版〔日本色研事業株式会社 2002〕を使用した。
3. 遺構実測図中の標高はすべてメートル単位で記している。
4. 本文・図版の記号について、「SI」は竪穴住居跡、「SK」は土坑・陥穴状遺構、「SD」は溝状遺構を示す。そして原図・台帳・遺物注記にもこれらの記号を用いている。
5. 実測図中の破線は推定線を示している。
6. 図版掲載中遺物の縮尺は土器が3分の1、石器は第2次調査の方は等倍、付録に掲載の石器は5分の1となっている。
7. 本文中に掲載した第19・24図は1971年作成の土浦市都市計画図55・56を中心に、第1次調査報告書〔青木・大島1983〕の全体図を合成して作成した。

## 永国遺跡調査会組織

### (役員)

会 長	須田 直之 (土浦市文化財保護審議会長)
副 会 長	石毛 一美 (土浦市教育委員会教育次長)
理事 (事務局長)	岩沢 茂 (土浦市教育委員会文化課長)
理 事	飯沼 正勝 (土浦市役所建築指導課長)
理 事	大塚 博 (土浦市文化財保護審議会委員)
監 事	山本 順一 (土浦市役所監査事務局長補佐)
監 事	桜井 正広 (土浦市教育委員会総務課長)
事務局 長	宇津野利雄 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長)
事務局次長	三須 洋一 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長補佐)
事務局 員	石川 功 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長)
	黒澤 春彦 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹)
	比毛 君男 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹)
	堀部 猛 (土浦市教育委員会文化課主幹)
事務局員兼出納員	関口 満 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹)

### 現地調査職員

調 査 主 任	窪田 恵一
作 業 員	飯田志満子 飯村二美 大久保敦子 齋久保三郎 中野富美子 長谷川はるみ 長谷部裕子

### 整理作業職員

調 査 主 任	窪田 恵一
作 業 員	大久保敦子 中野富美子

## 目次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査日誌(抄)	2
第3節 調査・記録化の方法	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 地理環境	3
第2節 地形と地質—花室川流域の段丘地形—	3
第3節 歴史環境	5
第3章 調査成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 旧石器時代	10
第3節 縄文時代	12
第4節 古墳時代	24
第5節 室町時代以降	26
第4章 調査成果のまとめ	27
付編 第1次調査検出の旧石器時代資料	30
註釈・参考文献	32
写真図版	33
報告書抄録	43

## 図版目次

第1図 試掘坑設定と検出した遺構配置図	1
第2図 桜川南岸～花室川沿岸の段丘模式図	4
第3図 基本層序図	4
第4図 周辺の関連遺跡分布図	6
第5図 遺構全体分布図	9
第6図 旧石器時代調査区位置図	10
第7図 旧石器時代の石器実測図	11
第8図 縄文時代遺構分布図	13
第9図 陥穴状遺構の深度模式図	13
第10図 遺構実測図(SK-1・2)	14
第11図 遺構実測図(SK-3・4)	15
第12図 遺構実測図(SK-5・6)	16
第13図 遺構実測図(SK-7・8)	17
第14図 遺構実測図(SK-9・10)	18
第15図 遺構実測図(SK-11・12)	19
第16図 遺構実測図(SK-13・14)	20
第17図 遺構内検出の遺物実測図	21
第18図 遺構外検出の遺物実測図	22

第19図 永国遺跡北部の縄文時代遺構分布図	23
第20図 竪穴住居跡1号検出の遺物実測図	24
第21図 竪穴住居跡1号実測図	25
第22図 中世以降の遺構分布図	26
第23図 中世以降の遺物実測図	26
第24図 永国遺跡(第1・2次)の調査区位置図	29
第25図 第1次調査検出の旧石器実測図	31

## 表目次

表1 周辺関連遺跡一覧表	7
表2 石器観察表(1)	10
表3 石器観察表(2)	32

## 写真目次

調査区全景	巻頭写真
遺構内検出遺物	巻頭写真
調査区周辺の国土地理院作成航空写真	35
調査区全景(南から)	36
調査区全景(東から)	36
土坑1号～5号	37
土坑6号～10号	38
土坑10号～14号	39
竪穴住居跡1号	40
縄文土器・陶器	41
第2次調査検出の旧石器	42
第1次調査検出の旧石器	42

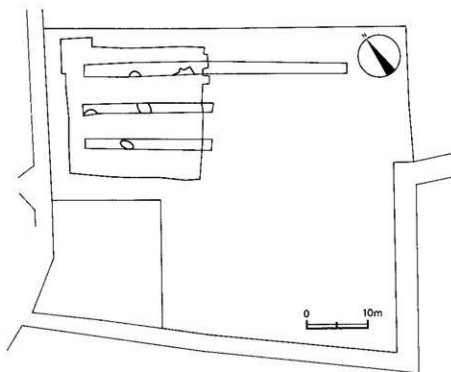
# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯 (第1図)

2002年1月30日に飯田をくに氏より、土浦市開発行為指導要綱に基づく事前協議申請書が提出された。その内容は約2,164㎡の土地において、集合住宅建設を行うという趣旨のものであった。このことを受け土浦市教育委員会では、申請地と遺跡台帳との照合を行った。その結果、申請地は周知の遺跡外であった。その後、現地踏査を実施したところ、現地は「パークシティー土浦」住宅団地の南西外縁にあつた。その土地はやや南東に向かって傾斜する谷頭をなし、栗や梅の木が植えられていた。地表面を観察すると、数量は多くないが縄文土器や中世の内耳鍋・陶器の破片が採集できた。

このような現地踏査の結果をかんがみ、市教育委員会では埋蔵文化財試掘調査を実施したい旨を事業者に連絡し、3月13日に調査を実施することで合意した。試掘調査は、申請地内に植えられている樹木の間をぬってトレンチを3本設定した。台地の平坦部が残る北東側に約40mの第1トレンチを設定、そして約20mの第2・第3トレンチを設定した。表土の掘削は、コンマ2.5のユンボにより実施した。第1トレンチでは、円形の土坑の一部と竪穴住居跡のかまど部分が確認された。続いて第2・第3トレンチでも道路側に寄って土坑が確認され、合計竪穴住居跡が1軒、土坑が4基確認された。

試掘調査の結果、今回確認された埋蔵文化財については、1974年に「パークシティー土浦」住宅団地造成工事に伴って発掘調査が実施され、それ以降湮滅したと考えられていた永国遺跡 (特にA地区)の一部と解釈した。



このような状況を踏まえ、事業者あて調査結果の報告を行い、今後の埋蔵文化財の取り扱いについて協議した。その結果、当初は開発予定地内での集合住宅の配置変更や遺跡保存のための盛土も検討したが、結果的に計画の変更は難しいとの考えが事業者より示された。その後の協議の結果、記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を実施することで合意した。

第1図 試掘坑設定と検出した遺構配置図



## 第2節 調査日誌（抄）

- 4月19日 調査予定地に集合して調査範囲の確認を行う。
- 5月9日 重機を搬入して表土除去作業を実施。遺構として竪穴住居跡（SI-1）1軒、楕円形の土坑（後に陥穴状遺構と確認、SK-1～14）14基、円形の土坑（SK-15～17）3基を検出。発掘機材の搬入。
- 5月14日 発掘調査を開始。検出遺構の全体測量を実施。仮杭とベンチマーク（標高25m）を設置。
- 5月15日 竪穴住居跡と陥穴状遺構の掘削調査。測量杭（7本）の設置。
- 5月16日 竪穴住居跡の掘削が進み竪穴部分を残り充掘状態に近づく。竪穴では天井の残存を確認。
- 5月17日 竪穴住居跡の完掘と同時に、重複する陥穴状遺構を1基確認。
- 5月18日 降雨のため野外作業を中止。
- 5月21日 竪穴住居跡と重複する2基を除き、他の土坑群の掘削を終了。
- 5月22日 竪穴住居跡の竪穴を切開調査。重複する陥穴状遺構の調査に着手。
- 5月23日 土坑群の掘削完了。南側の埋没谷に向かう緩斜面で遺構・遺物検出を行い石器2点を検出。
- 5月24日 遺構全体の完掘状態を写真撮影。竪穴住居跡北側に旧石器時代調査区を設定し掘削調査開始。関東ローム層中から石器1点を検出。第2暗色帯を掘り抜き掘削作業は終了。
- 5月25日 旧石器時代調査区で関東ローム層区分・観察。調査区北隅にて溝状遺構（SD-1）を検出。調査区を拡張して調査。午後に発掘機材の撤収を行い、陥穴状遺構の埋め戻しを行い現地作業を終了。
- 6月4日 上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて、出土遺物の記録化と報告書作成の各作業を開始。
- 9月28日 整理作業を終了。

## 第3節 調査・記録化の方法

今回の調査では国土地理院設定の平面直角座標系は援用せず、任意の測量用基準杭を設置している。遺構確認作業では、重機を使用した表土除去と人力による鍬簾掛けを併用している。竪穴住居跡では十字状に埋没土壌の観察用セクションベルトを設定し四分割での覆土掘削を行った。検出する遺物は平面位置と標高値を記録して取り上げたが、5cm以下の遺物は一括して回収している。竪穴に対しても覆土観察と構造体を切開して記録を作成した。陥穴状遺構では調査期間と作業量を勘案して全遺構での覆土観察を行わず、3基のみで覆土の観察を実施した。また底面付近の壁面で灰白色粘土層上面の標高も記録した。基本土層の観察は、旧石器時代調査区の関東ローム層と南側谷津に向かう緩斜面の黒色土部分で行った。

実測作業では縮尺20分の1を基本としながら、竪穴では縮尺10分の1で作図を行った。実測において竪穴住居跡では1m方眼の遺り方実測を行ったが、土坑群では平板実測を行っている。

調査では写真撮影による映像記録も作成している。撮影には35mmフィルムと6cm×7cmブローニーフィルムによるカラーリバーサルと白黒フィルムを使用している。

整理作業では遺物の洗浄・注記を施した後、採拓・実測を施し様々な観察記録を作成した。現地で作成した遺構実測図からは、修正を加えて第2原図を作成した。整理作業で作成した記録は基本的に管理用台帳に掲載され、さらに報告書掲載用の版下原稿となっている。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理環境

永国遺跡は茨城県土浦市永国に所在する。本遺跡は1974年「パークシティ土浦」の造成工事を契機として日本窯業史研究所が実施した発掘調査を第1次調査として、今回の調査が第2次調査となり、調査地点の地番は永国字御吳1029-2・3となる。

土浦市は茨城県南部に位置する中核都市で、市内にはJR東日本常磐線や国道6号・125号・354号の各一般国道や常磐自動車道が縦横に走る交通の要衝となっている。また、北には新治郡千代田町、東には同郡霞ヶ浦町、南には稲敷郡阿見町、牛久市、西にはつくば市、新治郡新治村が行政界を接している。そして日本国内第2位の広さを占める「霞ヶ浦」と接している。

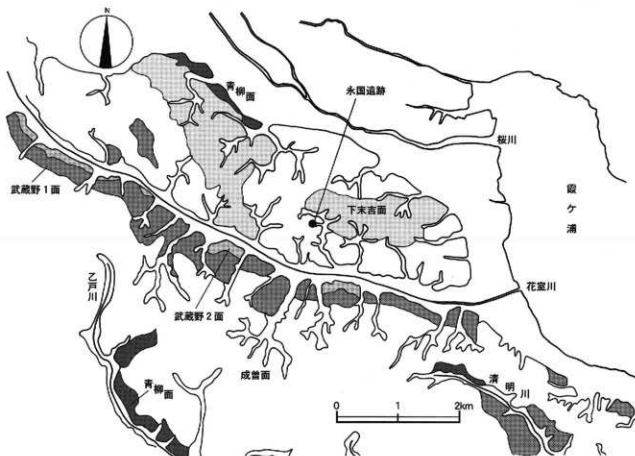
永国地区は常磐線土浦駅から南西に直線距離で2.5kmに位置し、さらに東側200mを常磐線が南北に走っている。西側には、国道6号線バイパスや354号(旧水戸街道)が南北に走る。1km四方には、郵便局や銀行などの金融機関や大規模店舗が立ち並ぶなど商業施設も充実している。天川団地やつくば市桜ニュータウンなど大規模な新興住宅群が建設される一方、南の花室川周辺には畑作地や水田が点在する景観が広がっている。

### 第2節 地形と地質—花室川流域の段丘地形—(第2、3図)

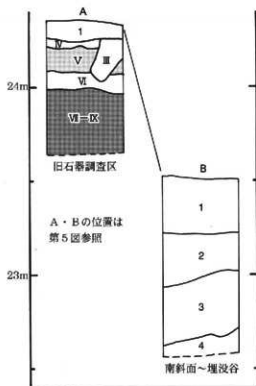
八溝山系南端の筑波山南麓周辺には、標高20m～30mの火山灰台地と多数の河川が流れ、段丘地形が発達した一角を上浦市域が占めている。土浦市南部を流れ現在は霞ヶ浦に流入する花室川は、つくば市玉取一の矢付近に源を発する全長14kmの河川である。ここでは花室川流域に特に発達した河成段丘地形について触れておきたい。

第四紀更新世後期の約13万年前をピークとした下末吉海進期には、茨城県南部の大半は古東京湾の一角で、海退開始以降の10万年から8万年前には古鬼怒川流域に鳥趾状三角州が形成され、この三角州が段丘地形形成の基礎となったとされている〔井内・斎藤 1993〕。

筑波山南麓に形成された下末吉面相当の上位段丘は、土浦市北部を流れる天の川左岸台地に発達し、形成開始が早い表流水や地下水湧出による開析が進行し、平坦面が少ない馬の背状の地形となっている。同様の地形が市内田村地区と花室川左岸の上高津地区と大岩田・小岩田地区に認められる。永国遺跡は大岩田・小岩田地区の上位段丘南麓で成増面相当の中位段丘(約7万年前から離水・乾燥化)との接点付近に位置し、花室川に向かい南に開口する幅60mの開析谷に面する。第1次調査A区では標高最高値25m、同調査B区では27m、第2次調査区では調査時点で削平を受けているが旧地形図では26mであり、上位段丘(最高値28m)と中位段丘の比高差は約1～2mである。一方、右岸(南側)台地には中位段丘よりも低い低位段丘が2面(武蔵野面:5万年前～、立川面:3万年前～)形成された。最寒冷期(2万年前頃)には古鬼怒川沿岸の段丘化(比高差20m～30m)が著しくなり、花室川も運動して下刻が進行していたと考えられる。完新世に移行してからは、地球温暖化の影響で海面が上昇、それまで川による地形変化が海からのものに移行する。各河川沿岸の段丘が埋没して「霞ヶ浦」の形成など、現状に近い地形的景観が形成されていく。この地形変更が遺跡の分布にも影響が及び、縄文時代以降の遺跡は標高20m以上の台地上に密集するようになる。



第2図 桜川南岸～花室川沿岸の段丘模式図



第3図 基本層序図

調査では風成堆積層の観察を行った。旧石器時代の遺構・遺物確認グリッド北壁では、関東ローム層を観察し層区分を行った(第3図A)。その結果、縄文時代包含層から軟質ローム部分まで遺跡上面が削平を受けていることを確認した。耕作土の下はすぐに硬質ローム(IV層)が露出し、第1暗色帯(V層)、AT包含層(VI層)、第2暗色帯(VII～IX層)と連続する。このIV層下部からV層にかけて旧石器を検出した。

縄文時代以降の遺物包含層(第3図Bの2～4)は削平を免れた両側斜面に残存していた。3層に区分し第2層は黒褐色土(7.5YR3/2)、第3層は暗褐色土(7.5YR3/4)、第4層は黒褐色土(7.5YR2/2)となる。第3層には赤色スコリアが多く含まれている。ローム層上面の標高差は21mの水平距離で1m下がる勾配率5%の地形である。第4層以下は漸移層を挟み関東ローム層、灰白色粘土層となる。谷部はローム層の堆積は薄く、すぐに粘土層が露出している。

### 第3節 歴史環境 (第4図、第1表)

本節では永国遺跡の時代内容に関連する周辺の歴史環境について紹介する。近年の発掘調査や資料の確認によって、従来知られていなかった旧石器時代の遺跡の所在がかなり濃密に分布することが判明してきた〔上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2001〕。今回の遺跡分布図にも22遺跡を表示している。現時点で確認した資料で最も古い資料は、内出後遺跡(16)出土の石器群である。Ⅹ層段階(武蔵野台地層位対比、以下同様に表記)に相当する資料で、基部加工のナイフ形石器や先細りの縦長剥片を剥離した黒曜石製石核などを検出している。次のⅨ層段階では遺物数は少ないが遺跡数の主体を占めている。本遺跡第1次調査資料(付編に掲載)、寺家ノ後A遺跡(8)、阿ら地遺跡(10)、向原遺跡(34)、烏山遺跡第1次調査資料(52)、寄居遺跡(62)、うぐいす平遺跡(63)等で、東北地方から搬入された硬質頁岩を使用した大型な石刃素材のナイフ形石器や石刃を検出している。Ⅷ層段階では十三塚A遺跡(5)や宮前遺跡(36)で信州系の透明度の高い黒曜石を使用したナイフ形石器や石刃を検出している。Ⅴ層～Ⅳ層下部段階では本遺跡今回の調査地点と向原遺跡〔窪田2002〕、右館跡(39)、長峰遺跡(48)、寄居遺跡で、高原山産と推定した黒曜石と鬼怒川流域産のガラス質黒色安山岩を使用した石器群を検出している。以降の段階における遺跡数は少なく、Ⅳ層上部段階では永国御免遺跡(4)和台遺跡(8)、扇ノ台遺跡(30)、宮前遺跡〔川口2000〕、上高津貝塚C地点(58)等が該当し、ガラス質黒色安山岩を中心とした小型のナイフ形石器石器群の存在が明らかになっている。槍先形尖頭器や細石刃石器群の段階は少なく、市内全体でも桜川(古鬼怒川)以北に多くの遺跡が集中している(註1)。旧石器時代終末の神子柴・長者久保段階の資料として、念代遺跡(42)ではホルンフェルス製の神子柴型石斧破損品を1点検出している。このように後期旧石器時代の各段階の資料が確認できる良好なフィールドであると考えられる。

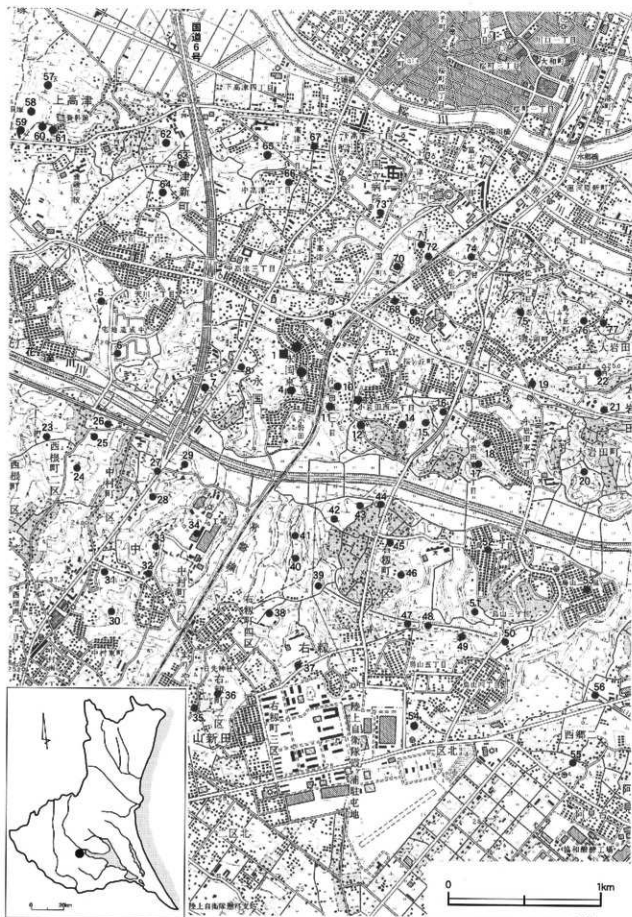
縄文時代では中期の資料を中心に、遺跡が多数分布する。陥穴状遺構は本遺跡第1次調査A区に14基が列状配置で検出された。今回の調査でも同じ陥穴状遺構が2列の列状配置を検出した。同様な遺跡として右岸台地の向原遺跡があげられる。調査によって陥穴状遺構群が1列の列状配置で検出され、少なくとも前期中葉の黒浜式以前の遺構群と考えられる〔越川・中野・處1987〕。

弥生時代では本遺跡第1次調査B区で竪穴住居跡2軒を検出している。その他には西根宮脇遺跡(23)、和台遺跡(8)、住居跡1軒、馬道遺跡(29)、谷原門C遺跡(33)、中根遺跡(38)、住居跡1軒、烏山遺跡第3次調査(52)、住居跡4軒、蛭田遺跡(57)、うぐいす平遺跡(63)でも遺構・遺物が見つかった(註2)。

古墳時代から平安時代では、今回の調査で古墳時代後期の竪穴住居跡1軒を検出した。花室川流域で最も注目すべき遺跡は右岸台地に立地する烏山遺跡であろう。1972年から1974年にかけて3次にわたる調査で、古墳時代から平安時代後期にわたる竪穴住居跡353軒、古墳9基(石倉山古墳群)を中心とした遺構が検出された。また烏山遺跡の最大の特徴は4世紀代の玉作り工房跡が検出されたことである〔大川・大門1988、西宮・大塚・小室1975〕。

鎌倉時代以降の歴史環境は不明瞭な点が多く、今回の調査でも16世紀頃の遺物が3点採取されたのみで、第1次調査B区にも古瀬戸碗や攪り鉢片、内耳土器が数点採取されているくらいである。

調査地点を含めた永国遺跡一帯は1970年代後半の開発が始まるまで松林であった。今回の調査地点は「パークシティ土浦」造成後、標高25m付近を削平して栗の木畑として使用されていた。



第4図 周辺の関連遺跡分布図

(国土地理院発行 1/25,000 に加筆)

表1 周辺関連遺跡一覧表

No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈々平	鎌倉	江戸	No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈々平	鎌倉	江戸
1	永国遺跡(2次)	○	○	○			○	○	40	内路地台遺跡		○					
2	永国遺跡(1-A)		○						41	牧の内遺跡						○	○
3	永国遺跡(1-B)	○	○	○	○	○	○	○	42	念代遺跡	○	○		○	○		
4	永国御吳遺跡	○	○	○					43	平坪遺跡		○		○	○	○	
5	十二塚A遺跡	○					○	○	44	沖の台遺跡				○	○		
6	寺家ノ後A遺跡				○	○			45	堂地塚遺跡		○		○	○	○	○
7	亀井遺跡				○	○			46	松原遺跡		○		○			
8	和台遺跡	○	○	○	○				47	数光遺跡		○			○	○	
9	ピヤ首遺跡		○			○			48	長峰遺跡	○	○			○		
10	阿ら地遺跡	○	○		○	○			49	小西遺跡		○			○		
11	才ノ内遺跡		○	○					50	南丘遺跡		○		○	○	○	○
12	いさろ遺跡	○			○	○			51	北平南遺跡		○			○		
13	油麦山遺跡				○	○			52	烏山遺跡	○	○	○	○	○		
14	谷畑遺跡		○						53	石倉山古墳群				○			
15	橋下遺跡				○	○	○		54	一区北遺跡		○					
16	内出後遺跡	○	○		○	○	○	○	55	中郷遺跡					○		
17	神出遺跡		○		○	○	○		56	西郷遺跡		○		○	○		
18	東出遺跡				○	○	○		57	蛭田遺跡		○	○	○			
19	霞ヶ岡遺跡		○	○	○	○	○		58	上高津貝塚	○	○		○	○		
20	西の前遺跡				○	○	○	○	59	貝塚南遺跡	○	○					
21	木曾遺跡				○	○			60	日光入遺跡		○					
22	内根B遺跡		○		○	○			61	諏訪窪遺跡		○		○			
23	西根宮脇遺跡	○		○	○	○	○		62	寄居遺跡	○	○		○	○	○	
24	平代地遺跡		○			○	○		63	うぐいす平遺跡	○		○	○	○		
25	諏訪遺跡				○	○			64	新町遺跡		○			○	○	
26	西根平遺跡				○	○			65	下高津小学校遺跡					○		
27	南達中B遺跡				○	○			66	中高津西原遺跡					○	○	
28	南達中A遺跡		○		○	○			67	弁天社東遺跡					○	○	
29	馬道遺跡			○	○	○			68	六十原A遺跡	○	○					
30	扇ノ台遺跡	○	○			○			69	六十原遺跡		○					
31	天神遺跡		○			○	○		70	園分遺跡		○					
32	谷原門A遺跡		○		○	○			71	池の台遺跡	○	○		○	○		
33	谷原門C遺跡		○	○	○	○	○		72	小松貝塚		○					
34	向原遺跡	○	○	○					73	大久保遺跡					○		
35	権現前遺跡		○						74	小松遺跡					○	○	
36	宮前遺跡	○	○		○				75	扇谷遺跡					○		
37	右羽宮塚遺跡		○						76	東谷遺跡		○		○			
38	中根遺跡			○	○		○		77	霞ヶ岡北遺跡		○		○	○		
39	右羽館跡	○					○										

## 第3章 調査成果

### 第1節 調査の概要 (第5図)

今回の調査では、開発面積2,164㎡に対して調査面積は当初430㎡で着手したが、東側や北側で検出した遺構が調査区設定境界の外に広がっていると判断し、面積12㎡を拡張した。その結果、調査面積は最終的に442㎡となった。

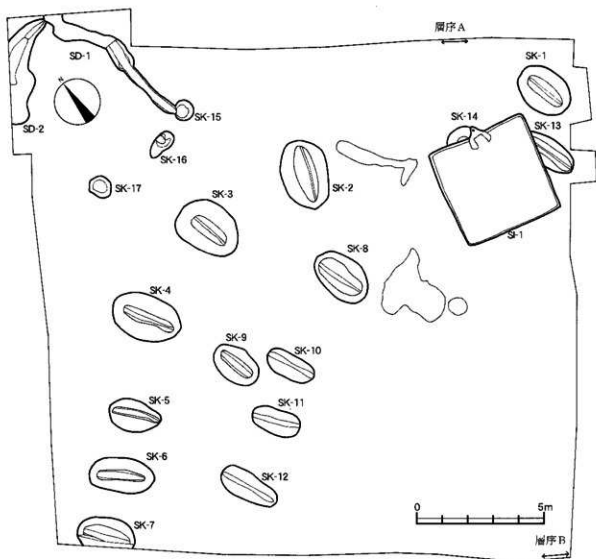
調査着手時の標高は24.8mであったが、表土除去や旧石器時代調査区でのローム層観察の結果、標高24.3mの硬質ローム層に達する削平が認められた。さらに1971年作成の都市計画図に拠ると、削平前の旧標高最高値は26mに達していた。周辺住民の方々からの聞き取りでも、「パークシティ土浦」造成以前に今回の調査区は松林であったが、造成工事以降に松林は伐開されたとの話であった。削平のためローム層がすぐに露出し遺構確認が容易であったが、縄文時代以降の遺物包含層は消失してしまっていた。さらに今回調査した遺構の上部も幾分か削平を受けていることも考慮しなければならない状況であった。調査区の南側には東方に開口する閉折谷の谷頭が一部含まれ、窪地状の地形が認められた。この窪地部分には、削平を免れた縄文時代以降の遺物包含層が最大0.8mの厚さに堆積していた。

調査によって縄文時代中期の陥穴状遺構14基、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒、中世以降と考えられる溝2条、円形土坑3基を調査した。また関東ローム層中からも旧石器時代の石器を数点検出した。遺構確認面において耕作痕跡はなかったが、除去し切れず深部に残った樹根があり一部擾乱を起こしていた(細線で範囲表示)。

旧石器時代の遺物は、表土除去作業中に住居跡の北側でメノウと凝灰岩の剥片を関東ローム露出面で検出した。しかし削平面であり縄文時代の石器の可能性も考えられることから、作業後半に旧石器時代の資料にあたるのかの確認調査を予定した。調査が進行してくると、住居跡や重複する陥穴状遺構(SK-1, 13, 14)からそれぞれ剥片を検出した。縄文時代の陥穴状遺構調査が進行し記録作成が終了した段階で、最初に石器を検出した付近に対し4m×3mの旧石器時代調査区を設定して掘削を行い、第2暗色帯を掘り抜いた。その結果、石器が最初に見つかった付近では硬質ローム層(IV層)が露出しており、掘削中にメノウの剥片を1点検出した。後の整理作業によって最初に見つかったメノウ製剥片と接合が確認され、硬質ロームから第1暗色帯(V層)に包含されていた石器であったと判断した。

今回の調査の最大の成果は、縄文時代の陥穴状遺構群を検出した点である。かつて第1次調査A区でも同様の遺構が14基、2列の列状配置に検出していたことと、試掘調査によって1mを超える楕円形の上坑が数基確認されたことから5、6基程度の土坑の検出を予想していた。表土除去の結果、14基の陥穴状遺構が2列の列状配置で検出した。最も近接するものは1m間隔の部分であり、かなりの密度で構築していた。南側斜面付近に残っていた黒色土～暗褐色土も掘削したが、数点の土器片や石器を検出してローム漸移層となる。標高24.5m以下には遺構は検出しなかった。この堆積層は3層に区分し、第3層は赤色スコリヤを多く含むが壁面への鎌掛け時にもあまり砂質感がなく、古墳時代以降のスコリヤ質の降下テフラと考えられる。

古墳時代の堅穴住居跡は1軒検出した。北壁はほぼ中央に竈を付設するもので、第1次調査A区では



第5図 遺構全体分布図

全く検出されていなかった遺構である。遺構内からは堅穴住居跡の埋没時期を示しそうな遺物はほとんど残されてなく、検出遺物の大半は縄文土器であった。これは重複した陥穴状遺構を損壊した際、包含していた遺物を2次的に堆積してしまったものと考えられる。遺構覆土の観察からは床面付近はローム粒子主体の土壌で構成され、人為的に埋め戻されていると考えられる状況であった。また上層にも遺物はほとんどなく、埋没過程で窪地となった場所に塵芥処理を行うほど周辺に人間の生業活動がなかった状況を想定せざるを得ない。住居跡埋没時の旧地表面が削平を受けて消失してしまっているため、これ以上の状況は判断できない。

中世以降の遺構としたものが調査区北隅に集中しているが、隣接する宅地造成が開始されるまで使用されていた旧農道が部分的に本調査区の北隅を掠めており、農道の関連施設の可能性も考えられる。中世後半の遺物は、調査開始前の現地確認時に採取したものである。

以上が今回の調査概要である。



## 第2節 旧石器時代 (第6、7図)

旧石器時代の調査は、表土除去作業中に石器を検出した調査区東側で、竪穴住居跡・陥穴状遺構の調査終了後に4m×3mの12㎡(対全調査面積比2.7%)で実施した。掘削深度は、周辺遺跡調査の経験から確認が容易であった第2暗色帯(Ⅶ-Ⅸ層)を掘り抜くまでを目標とした。その結果、表土除去で露出したローム層が硬質ローム層(Ⅳ層)であることが判明した。そしてそこからメノウの剥片を1点検出した。しかし、作業手順を間違えて出土地点を崩してしまい、石器の出土位置は記録していない。

今回の調査で出土した全点で9点の石器から、7点を旧石器時代の石器として取り扱う。

1はメノウ製のスクレイパーである。使用したメノウは明黄褐色を呈し隙間に結晶が生成されたもの。自然面打面を使用した厚みのある剥片の末端に、2次加工による連続した剥離によって刃部形成が施されている。

2は硬質細粒凝灰岩製の剥片である。打面側は剥片剥離後に折損して失っている。また末端側は形状から剥片剥離時に階段状剥離を生じたようだ。背面末端側に礫自然面が残っている。背面構成と腹面からこの剥片が剥離するまで打面を固定して同一方向に連続した剥離を施していたものと見られる。

3は4と5の接合状態を示した。淡褐色のある白色のメノウで自然面部分に褐色が認められる。

4はローム層掘削調査で唯一検出した石器で、メノウ製の剥片である。線状打面をなし、末端で階段状剥離を生じている。5とは腹面側で接合する。

5はメノウ製の剥片である。自然面打面を使用して、末端に階段状剥離が生じている。また右側縁は剥離時に縦割れを生じて失っている。

6はメノウ製の剥片である。複剥離面打面を使用して末端側が扇状に広がる形状の剥片である。

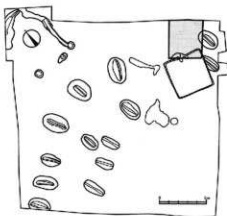
7はガラス質黒色安山岩製の剥片である。単剥離面打面を使用して、末端には階段状剥離を生じている。背面には礫自然面が残る。このガラス質黒色安山岩は大洗産と見られる。

8は流紋岩製の剥片である。礫自然面打面を使用している。この流紋岩は、鬼怒川流域産のものと見られる。

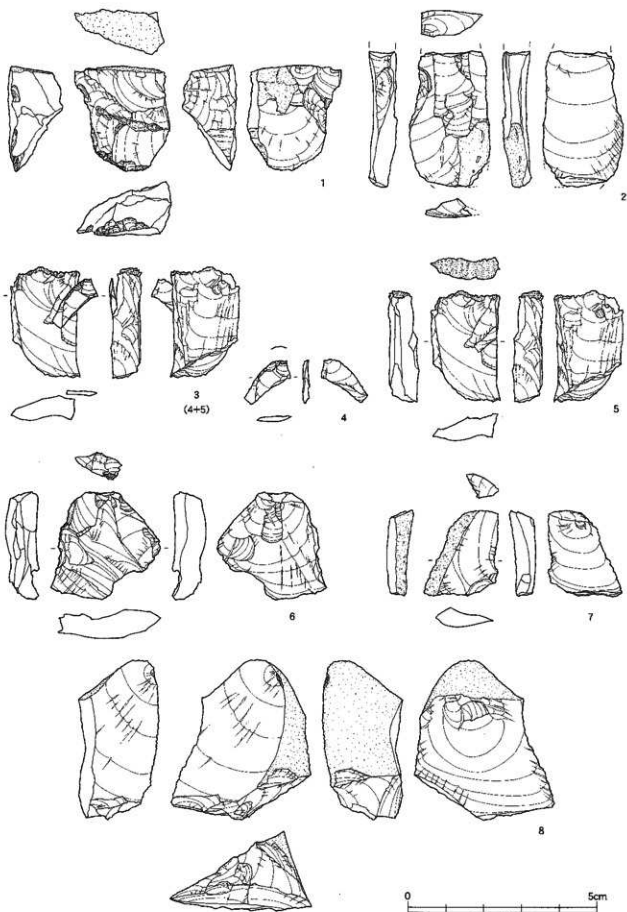
これらの石器はすべて旧石器調査区付近で検出したもので、2を除く石器がⅤ層～Ⅳ層下部段階の石器群と判断した。2は茨城県内では珍しい石材で利根川以西地域での利用が多く、形状からⅣ層上部段階の石器である可能性が考えられる。

表2 石器観察表(1)

No.	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	出土位置
1	スクレイパー	27.5	24.9	13.9	8.5	メノウ	土坑14号
2	剥片	(35.6)	(21.6)	(6.6)	(6.3)	硬質細粒凝灰岩	V層上面
4	*	11.2	13.0	2.0	0.1	メノウ	V層
5	*	29.5	18.6	7.2	4.4	メノウ	V層上面
6	*	28.3	27.0	8.2	5.4	メノウ	住居跡1号1区
7	*	(22.6)	(19.1)	(5.8)	(2.6)	ガラス質黒色安山岩	住居跡1号1区
8	*	44.1	37.0	21.6	23.1	流紋岩	土坑13号



第6図 旧石器時代調査区位置図



第7図 旧石器時代の石器実測図

### 第3節 縄文時代

#### 1. 遺構 (第8～16図)

該当時期の遺構として陥穴状遺構を14基検出した。この遺構は列状配置を構成しているのので、便宜上標高の高い方を第1列、低い方を第2列とする。第1列には7基（東から順にSK-1、2、3、4、5、6、7）が、第2列には5基（SK-13、8、10、11、12）が含まれ、列配置に一致しないもの2基（SK-14、9）も存在する。

基本層位の検討から、陥穴状遺構はすべて本来の掘り込み面が削平を受けていることが判明したことから、本来の開口部の規模よりも縮小していることを前提として、計測値から規模についての傾向を記していく。なお各遺構個別の計測値は、遺構個別の平面図面に掲載した。

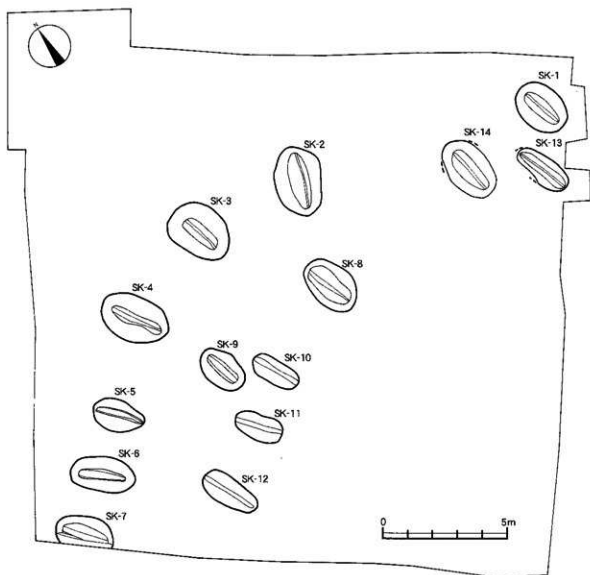
開口部はすべて長軸規模が2mを超えており、平面形状が長楕円形をなすものが多い。逆に底面は溝状で幅が8cmから27cmと非常に狭く構築されていた。構築深度も1.36m（SK-11、13）から2.17m（SK-3）までと様々である。底面はすべて風成堆積ローム層を掘り抜き、青灰色粘土層まで達している。掘削深度と粘土層の標高の様相を示した模式図（第9図）を示しておく。底面の長軸規模は開口部よりも短いものから開口部の長軸規模を超えてオーバーハングするものまでがある。また底面が直線をなすものばかりではなく、途中で屈折するものもあるなど形状は様々である。

開口部覆上の観察から、自然埋没状態のもの以外にも人為的に埋め戻されたと考えられる陥穴状遺構を確認した。検出面では大量のロームブロックでほとんど埋没して「地山」に見えるほどで、5cmほどの黒色土がリング状に認められた遺構（SK-6）もあり、確認が困難なものもあった。おそらく構築の際に掘り出したロームを、半ば埋没していた陥穴状遺構の窪み部分に投棄したのではないかと考えられる。このような遺構はSK-1、6、7、13、9の5基で認められた。これらの土坑の覆土中位から下位は底面近くが崩落ロームで埋没した後、黒色土が流れ込んだ状況でその上位にロームブロックが堆積していた。この様相からは、この陥穴状遺構がすべて等高線に沿って一時期に開口していたのではなく、構築時期が異なる遺構の継続的構築により集中した結果として列状配置を呈したと考えられる。この構築には埋没半ばの遺構を壊すことなく、遺構と遺構の間に詰め込む位置に構築していたため、間隔が狭い箇所が出来上がってしまったものと考えられる。

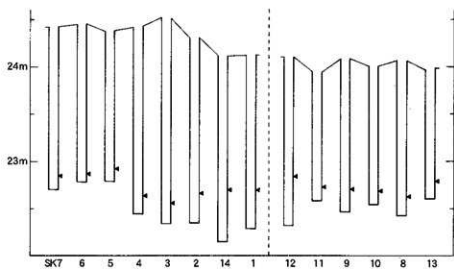
すべての覆土最下層には黒色土が堆積していた。底面が粘土層の影響もあって、非常に粘性を帯びた土壌であった。

#### 2. 遺構内検出の遺物 (第17図1～17、19～22)

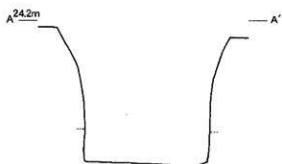
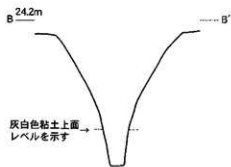
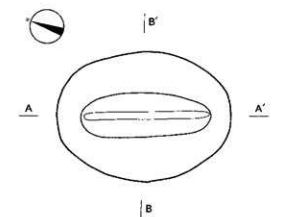
遺構内出土遺物は少なく、縄文土器片を40点検出したにとどまり、うち23点を掲載した。出土遺物は中期前半の阿玉台式（3、4、6～18、21、22）を中心に、中期後半の加曾利E式後半（1、2、5、19、20）の土器片である。同一個体の土器片（1・SK-2と2・SK-3、非接合）が隣り合う遺構内覆土中から検出したものもある。外面の施文のうち縄文では、単節縄文RL（1、2、5、12～14、16、18～20）、単節縄文LR（7、11）、が認められる。



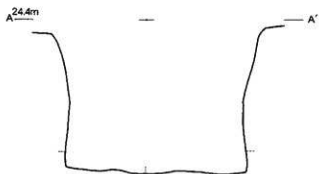
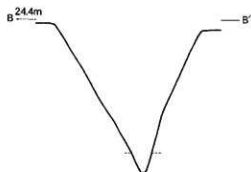
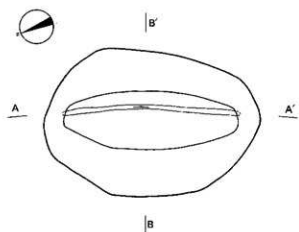
第8図 縄文時代遺構分布図



第9図 陥穴状遺構の深度模式図 (▲：灰白色粘土上面レベルを示す)



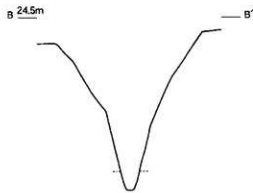
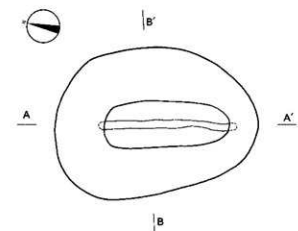
SK-1  
 開口部 2.31×1.72m  
 坑底面 1.66×0.21m  
 底面長軸方位 N-15°-W  
 検出深度 1.68m  
 出土遺物 未掲載1点



SK-2  
 開口部 2.88×1.98m  
 坑底面 2.36×0.11m  
 底面長軸方位 N-24°-W  
 検出深度 1.93m  
 出土遺物 第17回1  
 未掲載1点

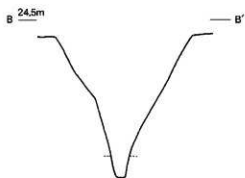
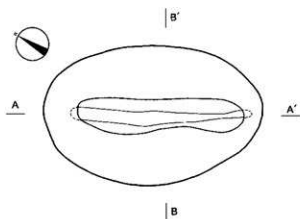
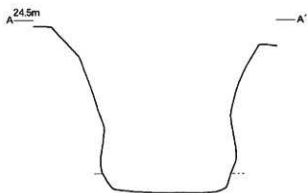


第10図 遺構実測図 (SK-1・2)



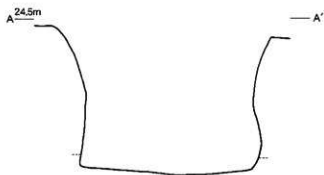
SK-3

開口部 2.71×1.87m  
 坑底面 1.83×0.11m  
 底面長軸方位 N-11°-W  
 検出深度 2.17m  
 出土遺物 第17回2・3・4  
 未掲載5点

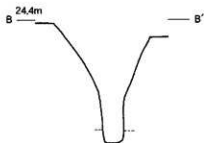
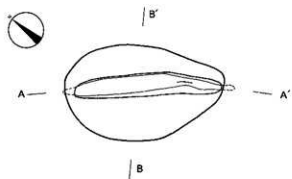


SK-4

開口部 2.91×1.84m  
 坑底面 2.40×0.19m  
 底面長軸方位 N-30°-W  
 検出深度 1.98m  
 出土遺物 第17回5  
 未掲載1点

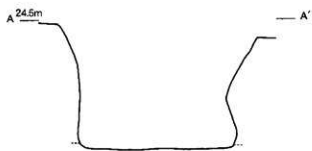
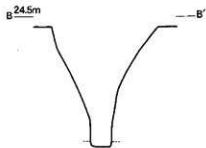
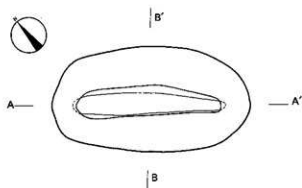


第11図 遺構実測図 (SK-3・4)



SK-5

開口部 2.14×1.30m  
 坑底面 2.27×0.20m  
 底面長軸方位 N-36°-W  
 検出深度 1.58m  
 出土遺物 第17回6  
 未掲載1点

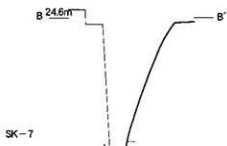
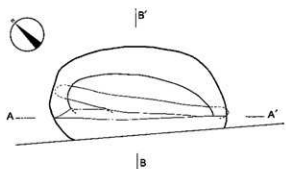


SK-6

開口部 2.64×1.40m  
 坑底面 2.03×0.27m  
 底面長軸方位 N-48°-W  
 検出深度 1.65m  
 出土遺物 第17回7  
 未掲載1点



第12図 遺構実測図 (SK-5・6)



開口部 2.34×(0.97) m

坑底面 2.31×0.22m

底面長軸方位 N-35°-W

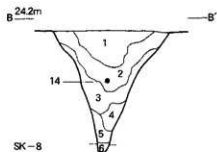
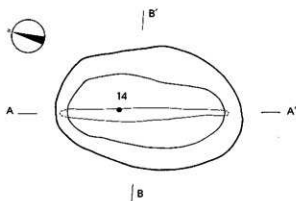
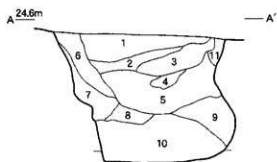
出土遺物 第17図8~12

検出深度 1.73m

未掲載3点

土層註記

- 1 暗褐色土 (7.5YR 8/4) ローム粒子、炭化物粒子
- 2 明褐色粘土 (7.5YR 5/6) ローム粒子、炭化物粒子、粘性強い。
- 3 褐色土 (7.5YR 4/6) 黒色粒子
- 4 褐色土 (7.5YR 4/4)
- 5 極明褐色土 (7.5YR 2/3) ローム粒子、炭化物粒子、黒色粒子
- 6 暗褐色土 (7.5YR 3/3) ロームブロック~粒子
- 7 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ロームブロック主体
- 8 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 黒色粒子
- 9 褐色土 (7.5YR 4/4) ロームブロック~粒子
- 10 明褐色土 (7.5YR 6/6) ロームブロック主体、黒色粒子
- 11 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ローム粒子



開口部 2.47×1.65m

坑底面 2.22×0.18m

底面長軸方位 N-18°-W

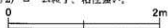
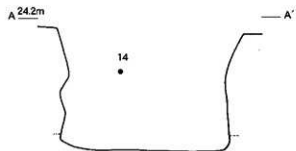
出土遺物 第17図13~16

検出深度 1.67m

未掲載3点

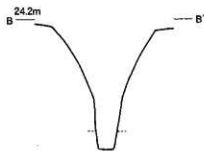
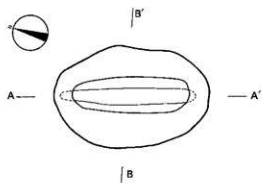
土層註記

- 1 暗褐色土 (7.5YR 3/3) ローム粒子~ブロック、炭化物粒子
- 2 極明褐色粘土 (7.5YR 2/3) ローム粒子
- 3 褐色土 (7.5YR 4/4) ローム粒子主体
- 4 暗褐色土 (7.5YR 3/3) ローム粒子
- 5 褐色土 (7.5YR 4/4) ローム粒子主体
- 6 黒褐色土 (7.5YR 2/2) ローム粒子、粘性強い。



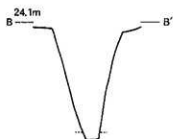
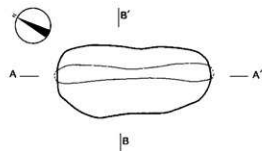
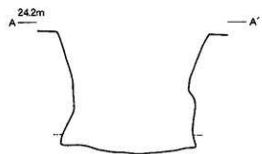
第13図 遺構実測図 (SK-7-8)





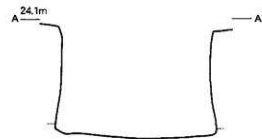
SK-9

開口部 2.06×1.36m  
 坑底面 1.79×0.21m  
 底面長軸方位 N-12°-W  
 検出深度 1.58m  
 出土遺物 第17期17

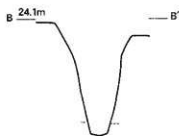
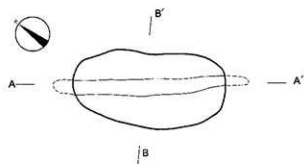


SK-10

開口部 2.05×0.91m  
 坑底面 2.12×0.24m  
 底面長軸方位 N-24°-W  
 検出深度 1.42m

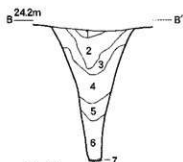
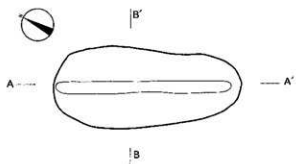
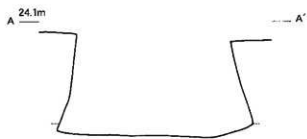


第14図 遺構実測図 (SK-9・10)



SK-11

開口部 2.03×1.09m  
 坑底面 2.59×0.21m  
 底面長軸方位 N-35°-W  
 検出深度 1.36m  
 出土遺物 第17図19~21

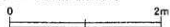


SK-12

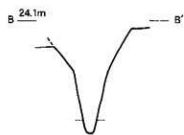
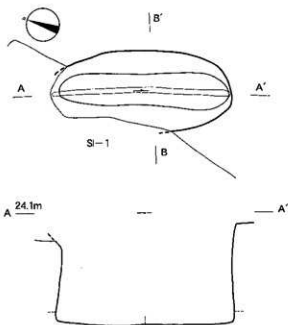
開口部 2.49×1.10m  
 坑底面 2.32×0.16m  
 底面長軸方位 N-23°-W  
 検出深度 1.80m

十層詳記

- 1 暗褐色上 (7.5YR 8/4) ローム粒子
- 2 暗褐色土 (7.5YR 3/3) ローム粒子~ブロック
- 3 暗褐色上 (7.5YR 8/4) ローム粒子
- 4 褐色土 (7.5YR 4/4) ローム粒子主体
- 5 明褐色上 (7.5YR 5/6) ロームブロック主体
- 6 褐色土 (7.5YR 4/4) ローム粒子主体
- 7 黒褐色上 (7.5YR 8/2) ローム粒子, 粘性強い,

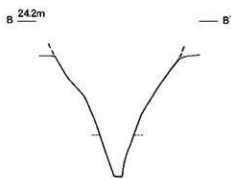
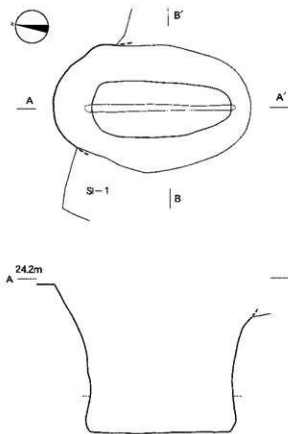


第15図 遺構実測図 (SK-11-12)



SK-13

開口部 (2.39) × (1.06)m  
 坑底面 2.36 × 0.12m  
 底面長軸方位 N-15°-W  
 検出深度 1.36m

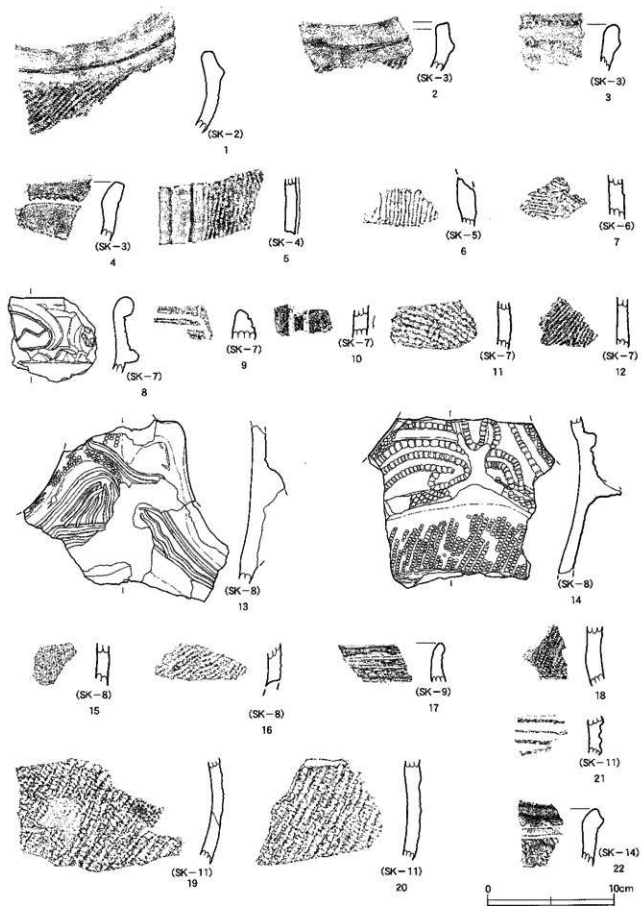


SK-14

開口部 (2.61) × (1.67)m  
 坑底面 1.98 × 0.08m  
 底面長軸方位 N-6°-W  
 検出深度 1.97m  
 出土遺物 第17図22



第16図 遺構実測図 (SK-13-14)

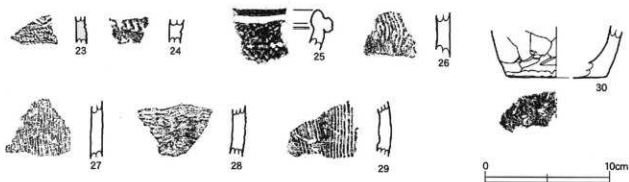


第17図 遺構内検出の遺物実測図

### 3. 遺構外検出の遺物 (第17図 18・第18図 23~30)

ここでは遺構外検出の遺物について紹介する。23はSK-13から検出した前期前半の黒浜式。胎土に繊維を含む。反撚り単節縄文RRLと並行沈線文が認められる。24は斜面覆土から検出した中期阿玉台式。角棒状工具による押引文が施される。25はSD-1で検出した阿玉台式。口唇部に貼り付けた隆帯が巡る。外面に単節縄文RLを施文する。26は表面採取した中期土器片。27・28はSD-1から検出した阿玉台式の土器片。27は撚糸R1を施文、28は単節縄文RLを施文している。29は条線文土器。30は阿玉台式土器の底部。外面に筥状工具による整形痕が認められる。

今回図示しなかったが、斜面第3層下部から白色メノウと珪質頁岩の小型な剥片を各1点検出した。



第18図 遺構外検出の遺物実測図

### 4. 縄文時代のまとめ

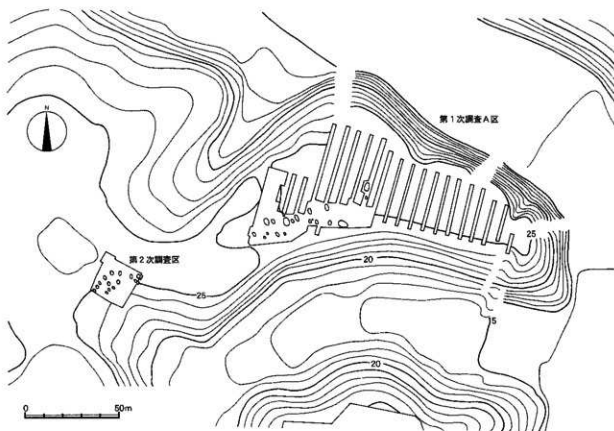
今回の調査では陥穴状遺構を14基検出した。この遺構の多くは等高線に沿う位置に2列の列状配置を構成しており、列に一致しなかったものもこの列間に位置する。そしてこの配列は台地南側の谷頭を囲むように台地南斜面に構築していた。比較的規模の大きな遺構は、標高の高い第1列に含まれている。当初この遺構群は見かけ上見事な配列をしているかのごとき構成であったが、覆土の観察からすべてが同時期に開口していたのではなく、時間差を持って構築と人為的な埋め戻しが行われていた可能性を考えるに至った。その場合、遺構相互の間隔が1m程度と近い距離に位置するものだけに、人為的に埋め戻された遺構が近接するという共通点がある。しかし、構築・使用に時間差があっても不思議ながら標高25mから24.7mの範囲に配列を保っている点が興味深い。構築場所に関して何らかの構築規制が働いていたと考えられる。

今回の調査区との間隔が約60m離れている1974年に実施された第1次調査A区でも、同様の形態を持つ「長楕円形土坑」が14基検出されている。A区では台地の標高最高点26mからやや低くなった標高25mから24.7m付近の等高線が走る台地南側縁辺に、2列の列状配置が認められている。開口部長軸規模が最短で1.89mから最長で4.2mまでとばらつきがあるが、平均2.75mを測り今回調査区の平均値2.42mをやや上回る。しかし、本来の開口部がおそらく0.5m近い削平を受けていることから、平均値は近い値を示していたと考えている。より大きな規模の遺構が、標高の高い列に位置するなど、配列の状況と遺構の規模など共通点が多い。この状況から、第1次調査A区の遺構列と今回調査した遺構群は、本来一体の遺構群であった可能性が考えられる。そして未調査区の部分にも、少なくとも20基を超える陥穴状遺構が2列の列状配置で存在した可能性は否定できない。この推定が可能であると、150mを超える列状配置の遺構群となる。しかしA区の遺構群では、構築に関連する覆土

の観察は不明瞭で単純化された記載からは判断が困難であり、一体の遺構群であるならば、構築の時間関係はぜひ検討すべき課題であった。

陥穴状遺構群の構築時期も判断は難しい。遺構内検出遺物は遺構全体で土器片を40点検出したのみである。遺構との重複ではSK-13、14が古墳時代後期の竪穴住居跡と重複関係があり、SK-14の覆土中に住居の床面が構築され、ロームブロックによる貼り床が認められる点から、古墳時代後期以前である。また各遺構の覆土中には、縄文時代中期の遺物よりも新しい遺物が含まれていないことから、縄文時代中期後半まで構築、位置を移動させながら使用していたと考えられる。

永国遺跡の北側に当たるA区と今回の調査区では、縄文時代前期から中期までの資料が確認され、中期と推定される多数の陥穴状遺構と中期の竪穴住居跡（第1次調査A区34号住居跡）の存在から、中期を中心とした狩猟の場としての機能が強く意識された場所と考えられる。反対にB区は早期前半の燃糸文系土器から始まり、後期の加曾利B式期までの資料が連続して確認されている。遺物量の多寡が活動を反映しているならば、この地では早期中葉三戸式・田戸下層式と早期末葉鶴ヶ島台式期・茅山下層式期、そして前期後半浮島式後半から中期後半加曾利E式期が活動のピークであったと考えられる。遺構は早期末葉茅山下層式期と中期のフラスコ状土坑を検出しているが、早期中葉の遺構も隣接して存在していたのではないかと考えられる。東側の谷津を取り囲むように縄文時代の遺跡（ピヤ首遺跡、阿ら地遺跡など）が分布する地域なので、それらを含めた土地利用の変遷が少しでも明らかになることを希望したい。



第19図 永国遺跡北部の縄文時代遺構分布図

## 第4節 古墳時代

### 1. 遺構 (第21図)

今回の調査では、古墳時代後期と考えられる竪穴住居跡を1軒検出した。

規模は長軸4.15m×短軸4.15m×深さ0.35mを測る。形態は方形。主軸方位はN-13°-Eとなる。床は大半が硬化しているが東側壁近くに軟質部が認められた(一点破線で硬化・軟質境界を表示)。床の構築では、掘削面のまま使用していたらしく、貼り床は縄文時代の陥穴状遺構(SK-14)と重複する部分に僅かにロームブロックを貼り付けていた。柱穴は床下まで確認したが検出されなかった。

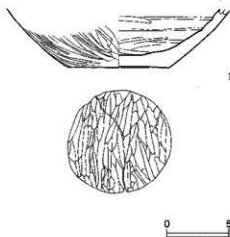
覆土はセクションベルト部分で13層に区分することができた。確認面付近上位は黒色土を基調とした土壌で、自然埋没している。一方床面を覆う第6層は褐色土を基調とするローム粒子主体層となり、人為的に埋め戻していると考えられる。その他にも6層の上に厚さ5cmの焼土ブロックが部分的に分布していた。竪そばには粘土粒子が含まれる土壌が覆土上層に分布していた。

竪は北壁の中央に付設している。規模は長軸0.86m×短軸0.86m、燃焼室には大井が一部残り、残存部分の厚さは7cmである。構造体両袖が床面から北壁に接する部分に、厚さが20cmから25cmで残る。また煙道部が直径20cmで残り、奥の壁には構造体と同じ粘土が貼り付けられたまま残っていた。構造体は暗赤褐色(5YR3/3)を示し、内面が赤く硬化していた。竪内覆土には元構造体であった粘土ブロックや炭化物があまり含まれず、煙道方向から流れ込んだ様子が窺われた。炊き口部分は底面が僅かに燃焼室側に向かって傾斜して下がり、赤化するほどではなかったが硬化している。竪の位置を炊き口部から燃焼室を覗くと、向かって右袖の奥には住居の北壁がみえ燃焼室の幅が炊き口付近と奥では幅が12cmほど狭くなっている。竪を部分的に拡張している可能性が考えられる。

### 2. 遺物 (第20図)

竪穴住居跡から検出した遺物は、大半が覆土上位の黒色土に包含されていた。検出遺物は13点で内縄文土器片7点、旧石器1点、土師器片は5点で床面から検出したのは1点のみと、非常に少ない。

1は唯一床面直上から検出した土師器甕の底部である。床に接するように、底面を下に正位で検出した。底径が8cmで中央が僅かに上げ底状を成す。器高残存値は4.7cmである。外面はヘラナデ調整、底面も並行するヘラナデ調整が観察される。内面は外側より器体を削り込むヘラ削り調整が残る。

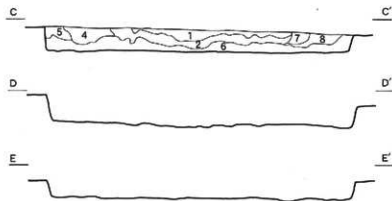
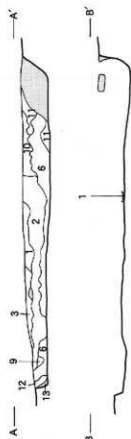
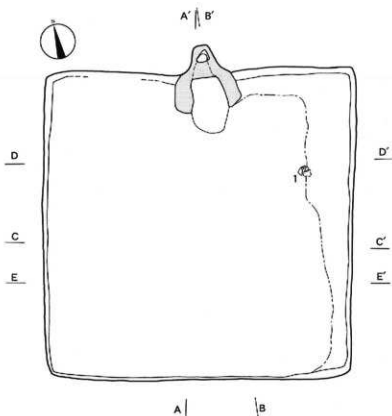


第20図 竪穴住居跡1号検出の遺物実測図

胎土には石英、長石と雲母片を多く含む。

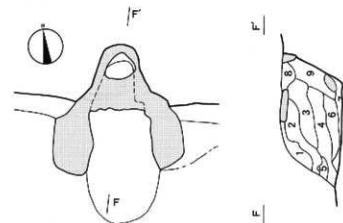
その他に出土した土師器は最大で5cmの小片で、甕の破片と推定している。これらの遺物から竪穴住居跡の時期は古墳時代後期と考えられる。

竪内部にも遺物は土師器の小片2点のみで、時期を示す遺物はなかった。



竪穴住居跡

- 土層註記
- 1 暗褐色土 (7.5YR 2/2) ローム粒子極めて多量、炭化物粒子、焼土粒子
  - 2 灰色土 (7.5YR 2/1) ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子
  - 3 黒褐色土 (7.5YR 2/2) ローム粒子、焼土粒子
  - 4 暗褐色土 (7.5YR 3/3) ローム粒子極めて多量
  - 5 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ローム粒子
  - 6 褐色土 (7.5YR 4/6) ローム粒子
  - 7 暗褐色土 (7.5YR 3/3) ローム粒子極めて多量、焼土粒子
  - 8 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ローム粒子、焼土粒子
  - 9 褐色土 (7.5YR 4/4) ロームブロック
  - 10 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ロームブロック~粒子、焼土粒子
  - 11 褐色土 (7.5YR 4/4) 粘土ブロック~粒子、焼土粒子、炭化物粒子
  - 12 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ローム粒子、焼土粒子
  - 13 褐色土 (7.5YR 4/6) ロームブロック跡



竪 土層註記

- 1 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ローム粒子、炭化物粒子、焼土粒子
- 2 暗褐色土 (7.5YR 3/4) 粘土ブロック~粒子、焼土粒子、炭化物粒子
- 3 暗褐色土 (7.5YR 3/4) 粘土ブロック~粒子、焼土粒子、炭化物粒子
- 4 暗赤褐色土 (5YR 3/4) 焼土ブロック極めて多量
- 5 褐色土 (7.5YR 4/6) 焼土粒子、炭化物粒子
- 6 暗褐色土 (7.5YR 3/4) 焼土粒子、焼土粒子
- 7 暗赤褐色土 (5YR 3/4) 焼土粒子
- 8 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ローム粒子、焼土粒子
- 9 暗褐色土 (7.5YR 3/4) ローム粒子、粘土ブロック、炭化物粒子

第21図 竪穴住居跡1号実測図 (測量基準標高: 24.2m)



## 第5節 室町時代以降 (第22、23図)

室町時代以降の資料としたものは、調査区北端に検出した溝状遺構2条 (SD-1、2) と、隣接する円形の土坑3基 (SK-15~17) である。

SD-1は長さ6.5m、幅0.8mほどで、深さは0.7m。底面の標高が北側に向かって高くなる。平面形はやや蛇行しながら北に向かって伸びている。一部には底面が掘り込面よりも潜り込む場所もある。

SD-2は長さ4.5mまでは確認した。幅は1mを測る。深さは1.5mを計測する。平面形状は緩やかに丸く湾曲して北側でSD-1と重複している。

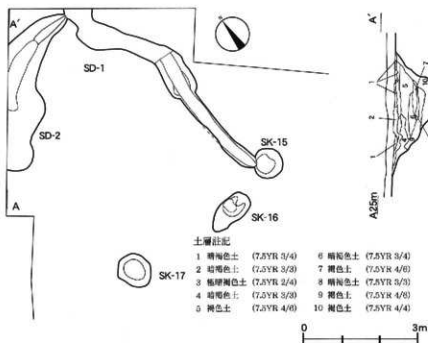
SK-15は直径0.8m×深さ0.4mの円形。SK-16は長軸1.2m×短軸0.6m×深さ0.4mの楕円形。SK-17は長軸1m×短軸0.9m×深さ0.3mの楕円形。覆土はすべて暗褐色土 (7.5YR3/3) で構成され、締りに欠ける。

遺構内からは縄文土器片を少数検出したが、時期を示す遺物は含まれていなかった。

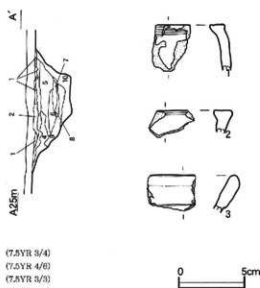
ここでは遺構外遺物として3点を掲載する。1、2は16世紀の内耳土器の口唇部破片である。僅かな破片のため口径は計測できなかった。3は近世の瀬戸・美濃系播鉢片。内外面ともに鉄軸が塗布される。胎土は灰白色。外面に段が1条ついている。この他にも常滑焼の甕胴部の小片が2点ある。

調査区北側に現在ある未舗装道路は宅地造成以前からある農道で、1971年作成の都市計画図でも北側の谷津に下りながら低地を渡り、さらに北側に続いている道路が記載されている。この道路に隣接する今回調査の溝状遺構 (SD-1、2) が、何らかの付帯施設であった可能性が考えられる。

第1次調査ではB区北側の谷津斜面付近で16世紀頃の内耳土器や播鉢片が見つかり、同区平坦部では古瀬戸平碗や常滑焼甕胴部破片、カワラケなどが検出されている。これらは小さな資料ではあるが、永国地区の中世史を物語る物質資料の存在は重要になっていくと考えられる。



第22図 中世以降の遺構分布図



第23図 中世以降の遺物実測図

## 第4章 調査成果のまとめ

### 1. 旧石器時代

今回の調査では標高の高い部分に、削平を受けながらも残っていたメノウを主要石材とした石器を少数検出した。時期は25,000年前に降灰した始良丹沢火山灰(AT)以降の資料で、武蔵野台地の層位対比で表示するとV層～IV層下部段階に相当する。この石器群には、土浦市内において発掘調査が実施された原田北遺跡(天の川流域)、石橋北遺跡(川尻川流域)、寄居遺跡(古鬼怒川流域)、右碓の長峰遺跡、向原遺跡(花空川流域)が同時期の遺跡として指摘できる。特に長峰遺跡ではメノウや玉髓を使用したスクレイパーが見つかり、向原遺跡では黒曜石製のスクレイパー刃部再加工工程を示す接合資料が見つかるなどしており、比較的多くの対比資料が分布している。今回検出したメノウは、内部に結晶が発達しないもので、茨城県北部を流れる久慈川産のものと考えられる。

### 2. 縄文時代

縄文時代の遺構としては陥穴状遺構14基を検出した。この遺構は長軸長2mを超える長楕円形の開口部を持ち底面は0.2mと非常に細い溝状をなす。遺構覆土の観察では開口部まで自然堆積で埋没したものと、開口部付近に大量のロームブロックが堆積しているものが数基認められた。遺構の構築時期としては開口時期を示す遺物は皆無であったが、埋没過程で遺物が流れ込んだ状況で検出している。最も古い遺物が中期前半の阿玉台式土器で、新しい遺物が中期末葉の加曾利E式土器であり、中期末葉頃には狩猟に利用されることもなくなり埋没したものと考えられる。

遺構群は台地平坦面の縁辺に等高線とほぼ並行して、南側の谷頭を囲むように2列の列状配置をなす状況であるが、人為的に埋め戻されたと考えられる遺構が含まれ、すべてが同時期に開口していたとは断定できないことを指摘した。しかし構築を繰り返しながらも、最終的に列状配置を構成していった設置規制の存在も考えなければならず、非常に興味深い事例である。遺構相互の配置間隔が2mを超える「疎の配置」では、人為的埋め戻しが行われたと考えられる遺構は無くほぼ自然堆積によって埋没したようだが、1m間隔で集中する「密の配置」では人為的に埋め戻しがあつたと見られる遺構が必ず存在している。同時に開口していて機能する単位が何基だったのかは、今回の調査範囲からは判断が難しい。

第1次調査においても今回の調査地点に続く台地上に設定されたA区に、「長楕円形土坑」とされた同様の遺構を14基検出している。形状も開口部が長楕円形である一方底面が狭い溝状をなし、規模も今回調査した遺構と非常に近い計測値を示している。そして台地内における立地・配置状況が酷似することから、本来は一体の遺構群であつたと考えられる。このA区の「土坑」群にも配置間隔に「疎の配置」や「密の配置」があり、おそらく今回の調査区同様に構築と埋め戻しが繰り返されながら最終的に列状配置を形成していったと考えられる。

この列状配置を構成していく契機となった設置規制について、狩猟場の固定化と維持を目的とする集団の存在を想定してみた。この狩猟場に近い同時期の集落の候補としては、南側から入る谷津を挟み北東150mに対峙する古伏台地に所在するビヤ首遺跡(第4図9)がある。この遺跡は1980年から茨城大学考古学研究室によって実施された分布調査の際に、縄文時代前期から中期にわたる土器片が

大量に分布することが確認され、最も近くに位置する同時期の集落と見られる。現在本遺跡とビヤ首遺跡との関連性を示す確実な証拠は提示できないが、南のB区には中期のフラスコ状土坑を4基検出したのみで住居跡はなく、居住域とその集団の管理する狩猟場という場の使い分けが行われた遺跡の候補として提示しておく。

### 3. 古墳時代

今回の調査では古墳時代後期と考えられる竪穴住居跡を1軒検出した。竈は天井部から側壁の一部が残り、煙道部も残っていた。覆土の観察からは床面全体が埋没するまで、ローム粒子を基調とする褐色土で埋め戻されていた。それは壁際で崖錐状堆積がなく、黒色土が含まれていないことから判断した。この埋め戻し土の中には粘土が含まれず、竈を破壊した場合に近くに散乱する粘土ブロックも含まれていなかった。粘土粒子は覆土上位の自然堆積土壌部分に含まれていることから、竈は焼絶時に破壊することなく、埋没過程の中で徐々に崩壊していったと考えられる。

この竪穴住居跡の中には廃棄された遺物がほとんど無く、埋め戻しによって投入された第6層中から土師器片を数点検出したにとどまった。数少ない資料ではあるが、おそらく6世紀後半頃の竪穴住居跡であると判断した。住居廃絶から埋め戻し以後、埋めきらなかった窪地を利用した塵芥処理が認められず、周辺に人間の生業活動が希薄だったことが窺われる。

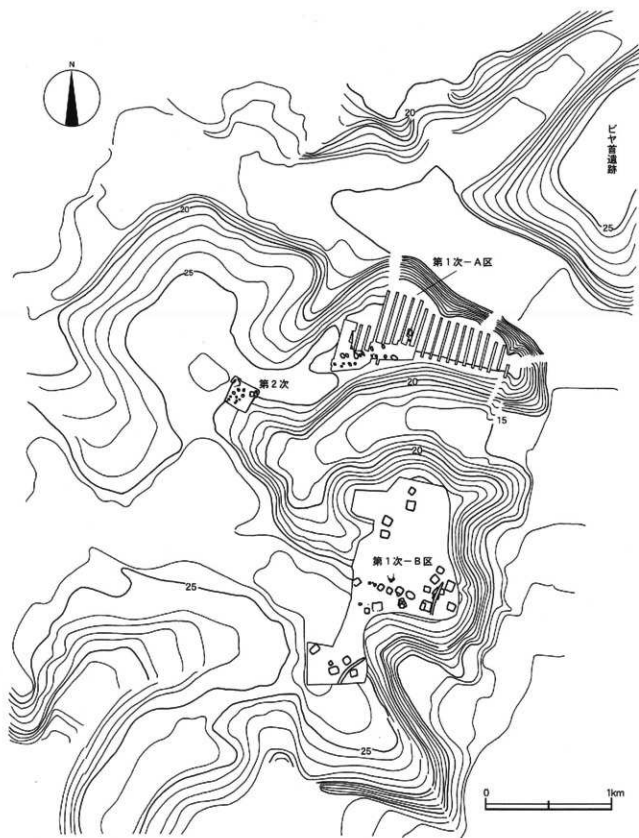
同時期の集落はB区にあり9軒を検出している。中央支群に5軒(15号・17号・18号・23号・24号)と南支群に4軒(22号・27号・28号・29号)と分かれている。規模は約5.5m四方から7m四方を超えるもので、すべて北壁に竈を付設し貯蔵施設の土坑と支柱穴を持つ。遺物から6世紀前半から6世紀後半の集落であると考えられる。この集落を構成する住居とは規模(4.5m四方)や貯蔵施設の土坑や支柱穴が設けられていないことから、小型の住居と見られ単独で存在していた可能性が考えられる。第1次調査A区では確認できなかった時代の遺構で、古墳時代にも北側台地で何らかの土地利用があったことを示す資料となる。

### 4. 奈良時代以降

奈良時代以降で次に遺物を残していたのは室町時代以降である。内耳土器や常滑焼き壺の破片などが数点見つかったが、内容は非常に貧弱である。標高の高い付近の削平を受けたことを考慮しても、活発な土地利用は窺えない。第1次調査B区でも内耳土器や古瀬戸の平碗、常滑焼やカワラケが数点見ついているが、花室川に開口する谷津に沿った奥まった場所では、生業活動は活発だったとは考えにくい。

南西には長徳元年(995年)永国亀井に成尊僧都が開山した今泉寺があったとされ、一時つくば市西平塚に移転し大聖寺と改名したが、天正年間に再び永国の現在地に戻っている(註3)。やはり、花室川に面した現在の永国集落付近が当時の村落の中心で、本遺跡はその周縁地域であったと考えられる。

調査から本報告書作成に当たり、多くの関係機関並びに関係各位から御指導・御協力を賜ったことに對して、文末ながら深く感謝の意を表するものである。



第24図 永国遺跡（第1・2次）の調査区位置図

## (付編) 第1次調査検出の旧石器時代資料

ここでは1974年の第1次調査で検出していたが、未報告であった旧石器時代のもものと判断した資料を紹介する。永国遺跡の旧石器時代を理解するためにも重要と考えたからである。器種はナイフ形石器1点、槍先形尖頭器1点、スクレイパー1点、両極剥離のある剥片1点、剥片8点の合計12点である。このうち6点を図示し、技術形態の観察内容と石材に関する内容を中心に記す。

1はナイフ形石器である。背面構成の観察では、上下両設の縦長剥片剥離工程で生産された縦長剥片を素材とする。複剥離面打面を使用した間接打撃による剥片剥離であったようで、パンチコーン(割れ円錐)と1mmほどのパンチホールが認められる。素材剥片の打面を基部側に置き、剥片末端側を中心にポイント状の先端を整形している。左側縁に使用による微細な剥離面が点的に認められる。石材は灰黄色の硬質頁岩を使用している。

2は槍先形尖頭器である。二次加工が全面に及んでいるため、素材の形状が不明であるが、側面からの観察では、背面に厚みが偏在し長軸方向に緩やかに湾曲することから、厚さが少なくとも1cmある縦長剥片を素材として見られる。二次加工の大半は、軟質ハンマーによる直接打撃による剥離で、押圧剥離はほとんど見受けられない。石材は大洗産のガラス質黒色安山岩と見られる。

3はスクレイパーである。末端側が広がる扇状の縦長剥片を素材としている。末端側に60度から75度の剥離角で整形して、円刃が設けられている。素材剥片時の打面は折損して失われている。石材はやや灰色気味の黒曜石で信州産と見られる。

4は剥片である。背面構成では90度剥離方向を転移しており、左側縁は節理面が打面として使用された痕跡を示す。石材は黄玉石である。

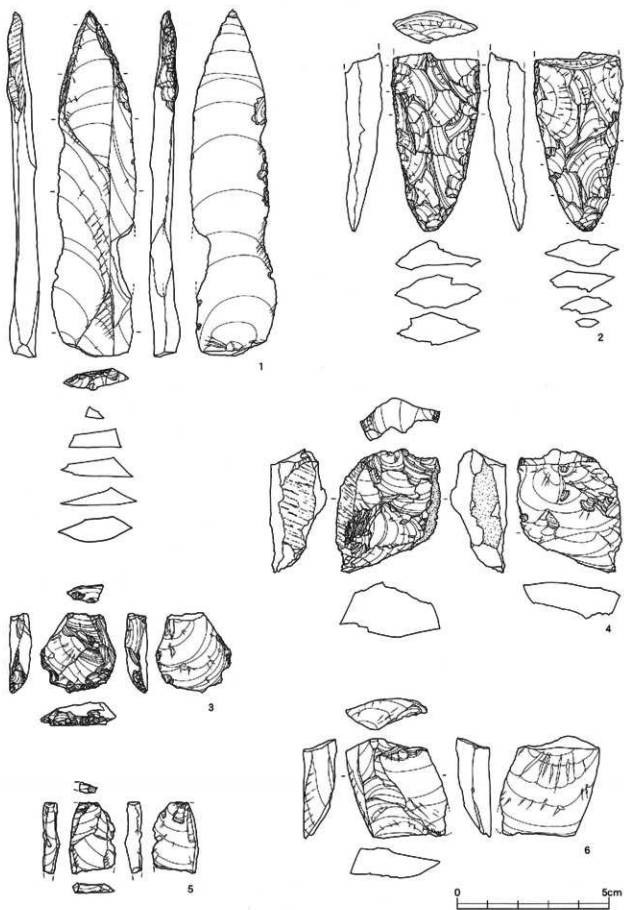
5は剥片である。複剥離面打面を使用して剥片剥離を行ったようだが、打点から同時縦割れを生じ、さらに末端側を折損している。石材は乳白色の流紋岩である。

6は剥片である。背面構成では180度打面転移を経過している。石材はトロトロ石(ガラス質黒色デイスイト)である。

この他には、両極剥離のある剥片1点(ガラス質黒色安山岩)、剥片5点(ガラス質黒色安山岩3点、トロトロ石1点、白色メノウ1点)がある。出土位置は大半が後世の遺構の中から検出している。

この石器群はすべてが同時期とは考えられず、筆者は2時期を想定している。古いほうは武蔵野台地層位対比Ⅵ層段階でAT降灰期以前の石器群と判断した。この時期の石器としては、1のナイフ形石器、3のスクレイパー、4～6の剥片、図面未掲載の剥片を含めた。特にトロトロ石の剥片は桜川(古鬼怒川)左岸台地に立地する弁才天遺跡や下郷遺跡でAT降灰期以前の石器として検出されている。その他の使用石材も、ガラス質黒色安山岩を主体に硬質頁岩、黒曜石、流紋岩、黄玉石など多彩である。新しい時期の資料としては、旧石器時代終末の細長い槍先形尖頭器と対比できるものと考えている。神子柴・長者久保系石器群では硬質頁岩を使用した石器であることや、整形技術に押圧剥離を主体とする縄文時代草創期の石器群から見ると、やや古いと考えておきたい。周辺では、神子柴型石斧(ホルンフェルス製)が1点あるくらいで、前後の時期を含めても槍先形尖頭器の確認例は少ない。

永国遺跡出土資料は以上の資料を含めて、Ⅵ層段階、Ⅴ層～Ⅳ層下部段階、終末期段階という3時期の石器が確認できたことになる。花室川流域の資料のなかでも、多時期の資料を含む貴重な事例であると指摘しておきたい。



第25図 第1次調査検出の旧石器実測図

表3 石器観察表(2)

No.	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	出土位置
1	ナイフ形石器	114.5	27.7	7.8	23.6	硬質山岩	-
2	槍先形尖頭器	(59.9)	(29.4)	(12.1)	(18.8)	ガラス質黑色山岩	B区住居跡1号
3	スクレイパー	26.4	24.8	7.4	4.5	黒曜石	B区住居跡27号
4	刮片	44.9	34.1	19.2	25.5	碧玉石	B区住居跡22号
5	*	(22.9)	(15.6)	(4.9)	(1.7)	流紋岩	B区住居跡32号
6	*	34.6	32.8	12.0	11.4	トロトロ石	B区溝

## (註 釈)

(註1) 槍先形尖頭器では天の川流域の原田遺跡群、細石刃石器群では川尻川流域に分布する田村沖宮遺跡群などが相当する。

(註2) 土浦市の弥生時代については黒澤春彦氏が纏められている【黒澤2001】

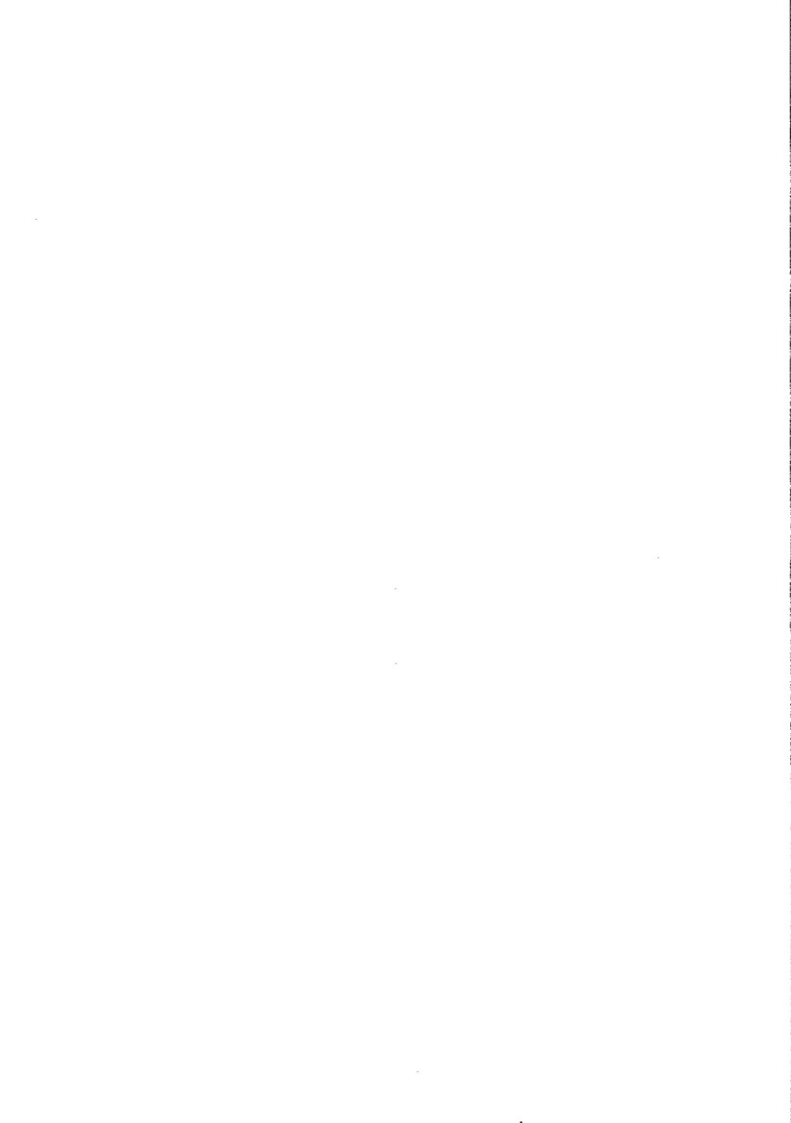
(註3) 大聖寺跡と推定されていた場所は、「西平塚梨ノ木遺跡」として2001年に発掘調査が実施された。その結果中世後半の遺物を検出したが、大聖寺の所在を断定するまでには至っていない【高野2002】。

## 【参考文献】

- 井内英郎・斎藤文紀 1993 『海路湖の地史3 賈ヶ浦』『URBAN KUBOTA』32 株式会社クボタ広告宣伝部
- 大川 清・大門直樹 1988 『茨城県土浦市 烏山遺跡』土浦市教育委員会
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2001 『第7回企画展 土浦の旧石器(土浦の遺跡5)』
- 川口武彦 2001 『花室川流域の「砂川期」遺跡』『石器文化研究』10号 石器文化研究会PP.131-141
- 窟田憲一 2002 『土浦市向原遺跡における2時期の石器群 花室川流域の旧石器時代研究』  
『土浦市立博物館紀要』第12号PP.1~24
- 黒澤春彦 2001 『土浦周辺における弥生時代後期の様相』『土浦市立博物館紀要』第11号PP.1~14
- 越川敏夫・中野修秀・處 毅 1987 『向原遺跡』向原遺跡調査会・土浦市教育委員会
- 高野節夫 2002 『西平塚梨ノ木遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第196集
- 西宮一男・大塚 博・小室 勉 1975 『土浦市烏山遺跡(2・3次調査)』茨城県住宅供給公社

写 真 图 版







調査区周辺の国土地理院作成航空写真（1977年撮影）



調査区全景（南から）



調査区全景（東から）



土坑1号



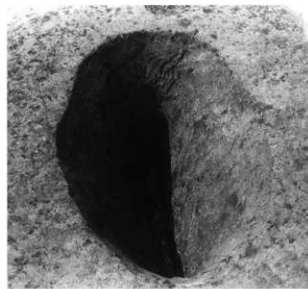
土坑2号



土坑3号-1



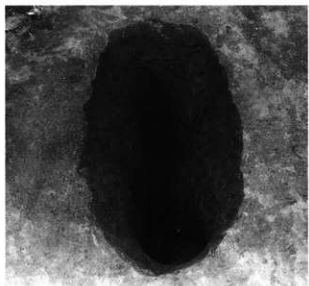
土坑3号-2



土坑4号



土坑5号



土坑6号



土坑8号



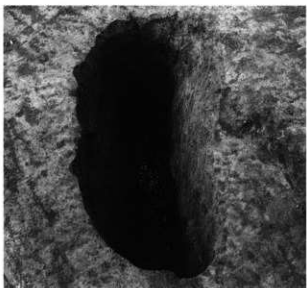
土坑7号



土坑7号セクション



土坑9号



土坑10号-1



土坑 10号-2



土坑 11号



土坑 12号



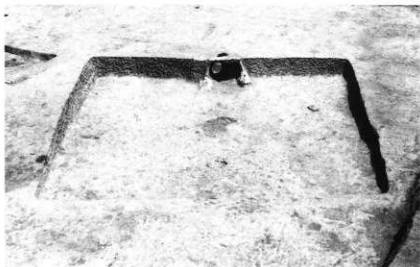
土坑 12号セクション



土坑 13号



土坑 14号



竪穴住居跡 1号



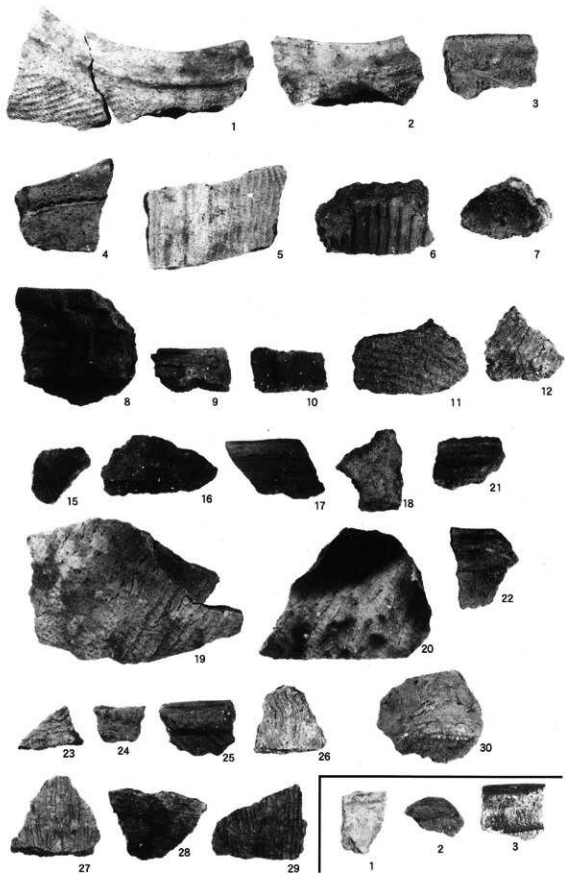
竈全景



遺物検出状況

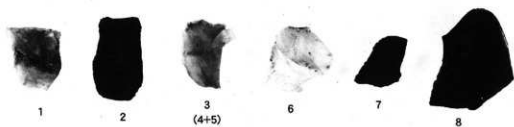


遺構内検出土器



縄文土器・陶器





第2次調査検出の旧石器



第1次調査検出の旧石器

# 報告書抄録

ふりがな	ながくにいせき (だいじちちようさ)							
書名	永国遺跡(第2次調査)							
副書名	飯田をくに集合住宅建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集名	窪田恵一	著者名	窪田恵一 関口 満					
編集機関	永国遺跡調査会							
発行機関	上浦市教育委員会							
所在地	〒300-0811 茨城県上浦市上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内							
発行年月日	2002(平成14)年9月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
ながくに いせき 永国遺跡	つちうらし 土浦市 おとあがながくに 大字永国 あびごりょう 字御吳1029	08-203	161	36度 4分 23秒	140度 11分 16秒	2002.5.14 ～ 5.25	442㎡	集合住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
永国遺跡	集落跡	後期旧石器時代 縄文時代 古墳時代	陥穴状遺構 14基 竪穴住居跡 1軒	スクレイパー・剥片 縄文時代中期の土器 古墳時代後期の土師器		1974(昭和49)年の永国遺跡(A地区)で確認された、陥穴状遺構と同様な状況が検出された。陥穴状遺構から出土した土器は、縄文時代中期のものである。		

---

---

## 永国遺跡(第2次調査)

飯田をくに集合住宅建設工事に  
伴う発掘調査報告書

発行日 2002(平成14)年9月30日発行

編集 永国遺跡調査会

〒300-0811 土浦市上高津1843  
上高津貝塚ふるさと歴史の広場内  
TEL 0298-26-7111

発行 土浦市教育委員会

〒300-0812 土浦市下高津2丁目7-36

印刷 菊池印刷株式会社

〒300-0811 土浦市上高津911-1  
TEL 0298-21-2525

---

---